KANDA, J.,

Research on the College Baseball, No. 1,

大學野球の實態調査から (第1報)

東京大学 神田 順治

1, 調査目的 野球が今日学生スポーツの一つとして隆盛を極めていくことは、今更指摘するまでもない。然し、隆盛の反面、学生スポーツの常道から逸脱する傾向の皆無であるとは云いきれないのである。本調査は、課外スポーツも大学体育の一環であるべきであるという観点から、先ず今日の大学生の野球が如何なる組織、質情の下に行われているか、そして如何なる問題が存在するかを明かにせんとするものである。

2, 調査の方法 全国を東北、北海道、關東、中部、近畿、中、四國、九州の五地域に分け、各地域より若干の大学を任意に抽出し、各大学野球部に調査表を配布し、その調査結果をまとめたものである。調査表はA, Bの二種で、Aは野球部に、Bは野球部員個人に配布し、記入して貰ったものである。大学は上記5地域より15校を選定したが、回答を送ってきたものは12校、回収率8割なので大体の傾向を把握することは可能と考えられるのである。

3, 調査の結果

(1) 部員の数

35名以上の大学 6校 25名以下の大学 6校

部員の多い大学には、野球の強い大学が、部員の少ない大学には野球の強い大学が多い。なお細くみてみれば

部員数

部員数

21~25

4校

33%

26~30

3校

25%

で10名以下の大学が全体の約6割を占めることになるのである。高校の割合には25名以下が75% (註1) であるから、高校に比べれば大学の野球部の方が世帯が大きいといえよう。

(2) 合宿所の有無、調査校12校中、5校が専用の合宿所を持っている。他は必要の場合に適宜の宿所を合宿所にして練習する程度であり、専用の宿泊施設は一般化されておらぬといえよう。

(3) 練習場 体育が大学の正課となっており、又今日の野球の普及状態からすれば、總ての大学が専用の練習場を持つておるようにならねばならないのであるが、実際には8校が専用の練習場を持ち、3校は他の運動部と共有であり、1校は全然持つておらぬ状況で、野球部はあつても、専用、共用の練習場もなく、學外施設を利用して漸く練習のできる大学のあることを示している。

(4) 練習時間について 1日の平均練習時間は各シーズン毎に多少の相異があると思われるので、各シーズン別の練習時間を調査したのであるが、その結果は次の通りである。

練習時間 シーズン	1時間 以下	2時間 以下	3時間 以下	4時間 以下	5時間 以下	平均
春(3月~5月)	0	1	3 (25%)	4 (33%)	2	3.08時
夏(6月~8月)	0	0	2	8 (66%)	2	4
秋(9月~11月)	0	1	4 (33%)	4 (33%)	3	3.75時
冬(12月~2月)	4 練習せず	0	2	6 (50%)	0	1.83時

上表によつて各シーズンの平均練習時間が明かになるが、やはり日の長い夏季の平均練習時間が最も長く、平均4時間であり、夏季において3~4時間練習している大学は、調査校中の66%である。これに對して、冬季の平均練習時間は1.83時間であるが、2~3時間練習する大学が半数の6校あり、全く冬季には練習を行わない大学が4校あり注目される。しかし、これによつて1年

を通じ最低3時間を練習に費している大学の多いことも示されるのであり、野球が強くなるためには、年中この程度の練習は少くとも行っているとみることができるのである。

(5) 従つて年間の練習スケジュールをみみると某大は

1月1日～7日 高知で冬季合宿 2月20日より春季練習 引續いて徳島遠征……3月末日まで 4月中旬より5月下旬まで春のリーグ戦 7月中旬より8月下旬まで夏季練習 9月上旬より10月下旬まで秋のリーグ戦 11月 某大と滞同試合 12月下旬より冬季練習

のようなスケジュールを強行している。これは1の特異な例であるかもしれない。しかし学生野球の選手達が1年間にこれ程まで試合、練習、合宿、遠征を行つているということは大いに考慮されてよいであろう。

(6) さらに年間の試合日数はどの程度であるかという点、公式試合10回乃至30回の学校が9校で75%を占めている。この回数は関東、関西の大学が春秋のリーグ戦で2回の總當り戦を行つている實情からすれば多すぎる試合回数とはいえず、先年の高校野球の實情調査による某校の51回(註2)に比較すれば妥當な回数といえよう。しかし、練習を兼ねての對外試合を含めて考えてみるならば、兩者を合して60回以上になる大学が2校あり、これは例外ではあるが問題にされてよい回数であろう。約7割の大学は、練習試合も10回～20回であり、我國の野球シーズン、春から秋にかけて行われている實情では必ずしも多すぎる回数とはいえないのである。

(7) さて、このような試合回数に對して部員はどのように感じているのであろうか。

多すぎるとする者 1名 0.7% 適當であるとする者 71名 47% 少なすぎるとする者 79名 52.3%

であり、前述のような試合回数を必ずしも多しとはしておらないのである。然し、試合や練習等が學業に差支えるか否かという問に對しては

差支えないとする者 40名 25% 少し差支えるとする者 108名 67.5% 大いに差支えるとする者 12名 7.5%

で、やや差支えるとする者が過半数を占めている。このことは、現實の大学野球で強チームになるためには、叙上の回数で妥當若しくは少なすぎるのであるが、半面學生の本分である學業と練習や試合との調和という点になると、やはり兩立し難い事を示しておるのであり、こゝに學生野球のディレンマの一端を伺うことができるのである。野球の技術の向上という面と、學業とを考慮する時に何處に一線をひくべきかということは仲々考慮を要する點ではあるが、この點解決なくして健全な學生野球ということはいえないのであり、商業化するか否かもこの點にかゝつていゝといえよう。このような矛盾は、恐らく個々の部員が克服しようと努力はしているのであろう。しかし大學當局や、各連盟等では何等かの對策を講じない限り、矛盾を解決し得ぬのみか、勝利を追求するための猛練習は、やがて學生野球の常道から逸脱してしまふことがないとはいへきれぬのである。(5)で指摘したような實情であるとするならば、早急に何等かの對策が立てられるべきであり、職業選手と同じように、冬季練習のために温暖地を求めて遠征することの可否も問題にされるであろう。例えばA. G. E.に Athletic Policy Committeeが勧告したような(註3)拘束力を賦した大學野球實施基準の定められることもよいであろう。このことは、やがて我國の學生スポーツを軌道にのせることにもなると考えられるのである。

(8) 次に野球部の經費であるが、10萬圓以下の大学が2校、10萬圓～20萬圓の大学が2校で他の2/3の大学は20萬圓以上を費消している。特に20萬圓以上の大学が5校もあることは注目すべきであろう。勿論、練習日数や部員の數等の相異があるので、この絶対値からのみ判断することは必ずしも當を得ていないにしても、一大學の一野球部の費用として妥當であるか否かは十分に検討されてよいであろう。

(9) 各大学野球部の指導者については、専任の監督をおく大学は2校、兼任の指導者を持つ大学8校、監督なしで學生自らで行つてゐる大学は2校である。監督の大部分、すなわち10名中9名は何れも母校出身者であり、専任者を除いては、報酬を受けてはおらない。實質的にはともかく、我國の大学野球の監督は、専任制はとられておらず、先輩が勤務の餘暇に指導しておるのが大部分の傾向であるといふことができるのである。この點も單に野球技術の指導者でよいから、さらには選手の Conditioning、さらに生活の指導も出来るような人物を求めようとするならば、兼任制で十分か否かの問題が出てくるであろう。

(10) さらに選手個人についての調査結果から明かになつたことにつき述べてみると

	實數	%		實數	%		實數	%	
中學1年	18		2年	31	21.5	3年	46	31.9	實數計 141
高校1年	40	27.7	2年	5		3年	2		

(イ) 大學の野球部に入っている者は、何時から野球選手としての生活をはじめているかという点、上表の通りであり、中學2年21.5%、3年31.9%、高校1年27.7%で、中學時代よりはじめた者が61.4%で、半数は中學時代から行つてきているのであり、さらに高校1年までを加えれば89%であり、おそくもこの時代から野球部選手として活動をはじめているのである。なお、この中の7割は中學、高校時代に正選手として活躍していた者達であることは注目されるのであり、少くも大學の野球部員となるためには、おそくも、高校1年までには野球部員としての正式の練習をはじめ、また正選手として活躍しておつたことが要求されているのであり、こゝに相當の練習をつみ、また技術も優秀な者が大學の野球部員を構成していることが明らかになるのである。たゞ全國大會、または地方大會に参加したか否かという點になると、高校時代地方的大會に参加した者、61.9%、高校時代全國的大會に参加した者、21.7%であり、それ程大會参加の経験は顯著ではないのである。たゞA級の大學、例えば關西の大學リーグにおける關西大、關西大、同志社大、立命館大等の大學では何れも全國大會には参加しなくとも、地方的大會には参加した者が、夫々80%、60%、62%、63%を占めていることは、やはり有力な選手は、強い大學に入つてゐる證さになるであらう。

(ロ) 野球部に入つて練習するようになった動機については

野球が好きだからとする者 49.30% 何かスポーツをやつてみたいと思つて 14.87% 身體を丈夫にしようと思つて 12.84%

等が主な理由で、友人、先輩、先生等にすすめられたり、さそわれたりしてはじめた者は比較的少數である。これはスポーツそのものの本質からしても當然のことであり、Passive であることより、Active であるが故に野球部に入り、なおかつ猛練習に耐えてゐるのであり「好きこそものの上手なれ」という格言そのまゝの傾向を顯著に示しておるということが出来るのである。

(ハ) 更に現在はどうのような氣持で野球をやつてゐるかという問に對しては

野球をすることが楽しい 30.9% 部員との人間接觸を深める 10.71% 身體が丈夫になる 8.56%

であり、身體的價值よりも、むしろ、社會的若しくはレクリエーション的價值を重視している。好きではじめ、楽しいのであれば、眞に野球そのものに没頭しきつておるとも云えるのであり、野球に對する愛着の深さが伺いしれるのであるが、更に野球を通じ、社會人となる素養を深めようとしたり、人格的接觸を得ようとしている者が合せて43%もあることは、學生野球が、野球の練習のみに終始してゐるものではないことの一端を示すものであるということができよう。

(ニ) 野球部に入つてどういふ利益があるかという點については、良い友を得た、良い師、良い先輩を得たとする者が夫々21.1%、19.7%、さらに他との協調性が豊になつたとする者6.58%で、これらを一括すれば70%、身體的價值よりも、社會的價值をより認めていることも一つの特徴であり、野球を通じ人間關係が深まり、強まつてゆく傾向を認めることができるのである。

(ホ) 野球部員は野球以外のスポーツを好むか否かという問に對しては157名中141名が他のスポーツを好きと答えている。どんな種目かといへば、ラグビー、バスケット、卓球、テニス、スキーの順であり、冬季スポーツが比較的上位にきている。昨年来例したアメリカ東海岸の大學選抜野球チームの選手の大部分が野球のオフ、シーズンにはアメリカンフット、ボール若しくはバスケット、ボールを行つてゐる(15名中10名はバスケット、ボールを、5名はフットボールを行つてゐると回答している)のと對比し、我國でもシーズン制が確立されいばとも思われるのである(本研究は文部省助成研究—1,26號—によるものである)

〔参考文献〕〔註1〕 春日正孝(1952) 高校野球の實態調査から、体育の科學、第2巻、第30號、213頁〔註2〕 同上〔註3〕 加藤隆夫(1951) アメリカにおける大學對校競技の諸問題、体育の科學、第3巻、第4號、140頁